

文藝と人間

——國文學の問題として——

小田良弼

日本の文藝は他國の文藝と類同性をもつ事の少い文藝である。にもかかはらずなほ多くの共通性を見出す事は困難ではない。しかも文化交流の現象の見られなかつたものとの間に酷似現象あるいは同一現象が見られる。この事は日本の文藝を考へる場合に、比較の方法による個性の把握あるいは歴史社會的な個性的意義の把握以外に一般人間性あるいは一般言語性の根柢からの説明の必要を示唆する。

さらに日本文藝の歴史において新しい世界が展開せられてきた場合について見ると、一般民衆との關係が重要な働きをしてゐるのが見られる。ここにも時代や民族を超えた一般人間性あるいは一般言語性からの考察の必要が示唆される。

文藝を考へる場合、二つの道筋が考へられる。作品を頂點とする三角形を考へれば、頂點より底邊への道筋と底邊より頂點への道筋とが考へられる。その前者が訓詁學の方向である。尤も訓詁學といつても現在における訓詁學がそのまま文藝の學としての訓詁學たりうるものとは私は考へてゐない。訓詁學が文藝の學において如何に必須のものであり基礎的のものであらうとも、それが現在の形のままで直ちに文藝の學とはなり得ない。勿論文藝の學といつても廣狹様々な解釋をとる事が許されるであらうし、極く廣い意味に解釋して此をその中に含める事に對してあながちに拒否しようとも思はない。然し、文藝の學を少し厳密な意味に解釋すれば、やはりこれをそのままで文藝の學と稱する事は不可能であらう。それは研究領域を異にする學であるからである。又廣い意味に解釋しても、なほ現在の訓詁學に對してはいろいろと考へて見るべき問題が多い様に思ふ。だからといつて如何なる意味においても訓詁學が文藝の學たり得ない性質のものであるかといへば、私はさうは考へてゐない。訓詁の學が文藝の學たり得る道筋はあるものと思つてゐる。頂點より底邊への道筋があるものと思つてゐる。勿論此を具現するといふことにな

れば、それは容易ならぬ事であり、今後長い苦しい努力が要求せられることであらうけれど、道筋としては考へ得るものと思つてゐる。

この訓詁學の逆の道筋が底邊の人間より頂點への道筋である。狹義の文藝は個性的創造である。國の個性を考へる場合にしても、一作家の個性を考へる場合にしても、一つには內的及び外的の比較の方法をとる事が要求せられる。文化の交流現象の有無にかかはらず、他との比較においてその個性的性格を明確にとらへることが可能になり、又個性的性格を明確にする有利な早道でもある。然しまた比較の方法は萬能ではない。そこには限界があり、これを超克することが要求せられてくる。またその個性的性格はある時ある所の個性的性格として肯定的に否定的にその環境の中にある。環境の中から生れる。と同時に環境を作つて行くものである。そこに個性を歴史的社會的環境において考へる事が要求せられてくる。その方法によつてその個性のもつ歴史的社會的意義が把握せられる。もともと文藝そのものが歴史的社會的環境において考へられねばならない性質のものではあるが、特に日本の文藝の場合その必要度が西洋の文藝の場合に比して一層高い様に思はれる。時代が下るにつれて一層その必要度が高くなる様に思はれる。背後において言語をつないでゐる世界が常に非論理的情緒的性格に支配されてをり且つ言語を表現の媒材としながら言語面を極小の方向におし進めて行く傾向が強いからである。

この様に或は比較の方法により國のまた作家の個性的性格をとらへようとし、或は環境においてある個性の歴史的社會的意義をとらへようとする事が要求せられてくる。一體に日本の文藝は世界の文藝においてははなはだ獨自性の強い、いはば癖の多い文藝である。支那の文藝と比較してもある面においては類似點をもちながらもその最も本質的な面においてははなはだ異質的なものをたたへてゐる様に考へられる。したがつて日本の文藝は東洋的として一括し得る面を一部にはもちながら、その最も本質的な面においてはかかる一括を許さない位に獨自的性格をもつ癖の多い文藝の様である。それだけに日本の文藝を研究の對象とすることは困難と興味を伴ふのであるが、就中その個性の問題はわれわれを強くとらへて離さない。とかく眼がその方面にのみ集中されるのである。かかる日本の文藝ではあるが、なほもう一つその奥底には一般共通性をたたへてゐる事を忘れてはならないと思ふのである。世界に類例を見ない様なものすらもち、癖の多い獨自性の強い文藝ではあるがその根柢において支那とは勿論西洋の文藝とも共通の面をたたへてゐるのである。そこに日本の文藝を考へる場合にも底邊から頂點への道筋が考へられるのである。今頂點より底邊への道筋、訓詁學の問題を別として、底邊より頂點への道筋について考へて見たいと思ふ。

☆ ☆
☆ ☆

從來あまり問題にもされてゐない問題かもしれないが、日本人もまた文藝をもつてゐるといふこと、この事が充分問題にされてよい問題である様に私は考へてゐる。癖の多い獨自性の強い日本の文藝ではあるが、この事においては西洋も支那も日本も共通である。いや世界のどこの民族においても、それがどんなに野蕃蒙昧であつても、何等かの意味において文藝をもたない民族は考へられない。世界に共通の、人間一般に共通の現象である。これは日本の個性として、日本の特殊現象として考へるべき問題ではない。また日本の歴史的社會的環境から説明し得る問題でもあるまい。人間は一體何故に文藝をもつに至るのであるか、ここに問題がある筈である。文藝が言語をその本質的契機とする以上、この問題は、一體何故に語るのか語り合ふのかといふ問題に還元される筈である。即ち日本を超えた一般人間の問題、一般言語の問題に連る問題である。日本の問題としてはその語り方、その性格、そのあり方、が問題になる場合にのみ問題としてとりあげられるので、その先の問題としての底にかかる問題がある筈である。

つぎに又記紀における歌謡の如き上古の文藝あるいは一般に民謡の如きものについて考へてみても、そこには既に何等かの點で日本の個性をもちつつも、なほ一般人間性としての共通面を強く現はしてゐるものと考へてよい様に思はれる。文献以前の上古の文藝においては殊にそれらの民族の個性よりは一般人間性としての共通面の方が壓倒的に強く現はれてゐるものやうである。ことに呪術的信仰と一體的に結びついてゐるものにおいては、根本的には世界的に共通してゐるものと考へてもよい位である。一般に上古の文藝や民謡の表現するところは、ある特定の個人が個人の意識をもつて自己の世界を表現してゐるものではない。それは何等かの意味において社會的交通の場において語られうたはれる集團そのものの表現である。そこに自己があらはれることは無いか或は極めて微弱である。いつの世でも社會的制約を脱して、完全に自己の世界に生きる個人は狂人以外には考へられないけれど、上古における社會的制約は今日に比してはなほ強力であつたものの様であり、それだけ自己の世界は抑壓されてゐたものと考へられる。生きて行く上の不安の度合が強ければ強いほど社會的制約の度合も強かつたと考へられるのである。上古の社會はコンバリウのいふ様に敵意に満ちた自然の中に裸で生きてゐた社會であり、かかる社會における社會的制約は極めて強く、

またその及ぶ範囲も廣かつたのである。かかる社會においてそれだけ個人の自覺、自己の表出は抑壓されてしまふわけである。かくて表出される世界は自己の世界ではなく集團そのものの表出となるわけである。またかかる上古の社會における文藝のはたす役割は安心確保であり鎮魂にあつたわけであるが、自己の表出ではなく集團そのものの表出であつたからこそ、その機能をはたし得たわけである。言葉の意味内容から見て、一見、安心確保、鎮魂の役割をはたし得るや否やを疑はしめる様なものすらがなほ充分にその機能をはたし得たのはかかる性格に基くのである。かかる自己の自覺のないあるいは極めて稀薄な上古の社會の集團的性格は又同時に極めて濃厚に一般人間性を露呈するわけである。したがつて記紀の歌謡の如き上古の文藝や、それと多分に共通性をもつ民謡においては集團として日本の個性を何程かはもちつとも濃厚に一般人間性の面を露してゐるわけであり、したがつてそれは日本の社會、日本の言語といふ特殊の面からだけは説明を許さない面をもつてゐるわけである。

あるいは又、記紀の歌謡の如き上古の文藝や民謡の如き廣義の文藝の場合だけではなく、中古中世の文藝の如きすでに口誦文藝の域を脱し文字文藝として、紙の上に筆を以て、自己の意識をもつて創られた文藝においてもなほ種々の點において決して偶然の一致とは考へられぬ他との共通點を見出す事は困難ではないのである。しかもそれが文化交流の結果として見られる共通點であるなら、今、當面の問題としてとりあげる價值はないわけであるが、文化交流の現象があつたと考へられぬ場合に偶然の一致とは考へられぬ共通點が他との間に多く見出せるとしたら、その背後には單なる特定の民族の特定の歴史的社會的環境のみからしては説明しきれないものをふくんでゐる事が考へられねばならないわけである。すなはち特定の民族を超え、その根柢にあつて民族を、歴史を、社會を成立たしめてゐる一般人間のなるもの、あるいは一般言語的なるもの、言語そのものゝ存在が考へられるわけである。

たとへば枕詞の如きはある意味では日本に独自の文藝現象といふことのできるものであるが、こんな枕詞の如きものですら、少くともその萌芽状態においては、決して日本独自の文藝現象ではないのであつて、ギリシャにも存在し、インドにも存在してゐる様である。またマレーにも存在してゐる。マレーのパントゥン (Pantun) におけるごときはよほど日本の枕詞に近接してきてゐる。四行詩幾節かの連続よりなるこのパントゥンにおいて意味は後の二行二行をもつてつながつて行く。先の二行二行はその詩篇の意味に直接の連關をもたない。しかもその先の二行が後の二行を引き出す上にある種のつながりをもつてゐるものがあるのである。だとすればこれは日本の枕詞とほとんどその性格を同じくすると

いつてよいのである。日本独自の作詩法上の技巧と考へられてゐた枕詞のごときものですら、この様にその類似現象あるいは酷似現象を数多く見出せるのである。だとすればこの枕詞のごとき最も日本的と考へられたものゝ解釋においてすらその説明根拠は日本を超えた、共通的な一般的地方にまで引き下げて求められねばならないといふことになるわけである。日本の歴史的社會的地盤の中に説明根拠が求められるとしたら、それは單に日本に固有のものとしてではなくして、世界に共通な一般人間の言語一般的なものとして考へられねばならない。

あるいはまた伊勢物語の

からころもきつゝなれにしつゝましあれば

はるばるきぬるたびをしぞおもふ

(かきつはた)

の如き、折句といはれるものも決して日本だけのものではなく *acrostiche* (*arcrostics*) として西洋の文藝にも同一のものが見られるのである。たとへばフランスにおける

Louis est un héros sans peur et sans reproche

On désire le voir. Aussitôt qu'on l'approche

Un sentiment d'amour enflamme tous les coeurs

Il ne trouve chez nous que des adorateurs

Son image est partout, excepté dans ma poche.

(Louis)

右の例はもはや類似や酷似の域を脱して同一現象なのである。フランスの折句である。また日本でいふ沓冠句も同じく *acrostiche* とよばれて存在してゐるのである。これももし、日本の折句や沓冠句がフランスに紹介されて、フランスの詩人達がこれを模倣したといふ確かな證據があれば當面の問題としては問題にならない。そんな證據はどこにもない。文化交流の現象なくして、かゝる同一現象が存在するとすれば、かゝる折句や沓冠句は日本に固有のものとして日本にその説明根拠を求めるとはできない筈である。

あるいはまた廻文と稱せられるもの

「むらくさにくさはなもじそなはらば

なぞしもはなのさくにさくらむ」

の如き頭から讀んでも終りから讀んでも同じに讀めるものも、やはり Palindrome と稱せられて同一現象が存在しているのである。たとへば

L'âme des uns jamais n'use de mal

あるいは

Roma tibi subito motibus ibit amor

のごとくである。この廻文についてもさきの折句や沓冠句と同一のことが考へられるわけである。

この様な折句、沓冠句、廻文のごときは單なる言語遊戯の域を出でないものであるとしても、それが單なる言語遊戯であるといふことは問題の重要さを減ずるものではない。いはんや文藝そのものが、よしそれを狹義の高い意味での文藝に解しても、なほ遊びの性格を持ち続けるといふ解釋が許されるとしたらなほさらである。

しかしまたかゝる單なる言語遊戯的なものばかりではなくして狹義の文藝現象の中にも似た様な現象を見出すことができるのである。王朝時代の勅撰和歌集及びその流れをくむ短歌について考へてみるに、それはある點ではなほだ日本的な性格の強いものであり、それだけに日本の言語、日本の歴史社會的環境の中に充分説明根據を求め得るかに見えるのであるが、これが全然文化交流現象の見られないフランスにおける宮廷詩と形態的にも内容的にも著しい共通點を示してゐるのである。律動形態からいへば本來流動的な長詩形をその主流とするフランス詩句において、宮廷詩においては *madrigal* の様な短詩形をとるのである。そしてその内容に於ても、優美繊細な洗練された神經の細かさの中にメランコリーをたゞへ、機智を弄し *élégant badinage* の要素を多分にもつてゐるのである。日本の王朝の勅撰和歌集と酷似を示してゐるのである。兩者におけるかゝる酷似點は如何に説明されるべきなのであろうか。律動本來の性格から云つて極めて短い詩形といふことは、その背後に餘程特殊な條件を考へねばならぬ筈であるが王朝短歌における様に、もはやこれが主形態となり、あるいは俳句形式の様なさらに一段とその性格を濃厚にしたものが主形態となり、その他の形態が姿をひそめる様な状態においては、かゝる形態を生み出したその背後にあるものがとかく閑却さ

れ易い。がフランスの如き流動的な長詩形を本體とするものにおいてはこれがはなはだしく目をひくのである。この問題は別途に考慮されるべき問題で、今こゝにふれることはできないが、この形態的特性はその内容と深い連關をもつものであり、あるいはまたその詩の創られる環境とも連關をもつものである。しかし文化交流の現象の見られなかつた日本とフランスの宮廷詩におけるこの酷似現象の存在は、これを單に日本の文藝における現象としては扱ひきれないものであることを教へるものである。王朝時代における勅撰和歌集の様な文字文藝としてすでに日本的性格を濃厚に出してきてゐるものにおいてすら、思ひの外に他との共通點をもつてゐるのである。如何にそれが個性的であつてもその個性の背後に常に一般人間的なものと言語一般的なるものゝ存在を教へられるのである。

あるいはまた、芭蕉の様にある意味では最も日本人くさい詩人、その長所においても缺點においても日本的性格を頂點にまで引あげてきたとでもいひ得る様なこの詩人においても、フランスの象徴詩人の頂點にあるマラルメとの間に、著しい共通面が見られる様なのである。勿論この兩者においては、芭蕉はある意味で最も日本人くさい詩人として、マラルメはフランス象徴派の代表的詩人として、異質的なものを多分に持つてゐることは疑へない。にもかゝらずその窮極の點において、その言語觀、表現論とでもいふべきものにおいて驚くべき一致點をもつてゐる様に私には考へられるのである。したがつてまた芭蕉の俳論をその門弟たちが残してくれたところによつて再建してみる場合にも、異質的な面は勿論ふくみつつも、西洋の詩論と思ひの外に共通點を見出すことができる様である。チポードによるマラルメ研究の前半を讀んで、もしそれがマラルメ解説である事を忘れるならば、これが同時に芭蕉解説ともなり得るであらうといふ強い印象をうけたことを覚えてゐる。言語あるいは表現について、無意識的にあるいは意識的に、直觀的にあるいは思索的に天才的な把握の能力をもつてゐたその兩者において酷似點一致點が見出せるのはあるいは當然であつたかもしれない。さうだとすれば芭蕉については、これを單に俳諧史の中の特定の點としてとらへ、元祿の時代の、あるいは芭蕉個人の環境からのみこれをとらへようとするだけでは決して十分にとらへ得たとはいへない様に私は思ふのである。この兩天才において示されたこの一致點酷似點から正に出發せねばならない。それは日本を超えた一般的な立場でなければならぬ。

☆
☆

こゝでしばらく觀點を變へて日本の文藝の歴史において新しい世界が展開された場合の事情について考へてみよう。大體において日本の文藝

は何等かの意味において貴族化され、それだけ固定化され類型化されて同一美的範疇の中に踞踏してきた傾向が強いといへる。今日われわれが自由な立場に立つて美しいものを美しいと感じてゐるのだと思つてゐる場合でも顧みればそれが王朝人によつて教へられた美の世界である事が意外に多いのに驚く位である。新しい世界を展開してもよい筈であつた連歌もいつの間にか王朝的美の世界に屈服してしまつたし、事實新しい世界を展開した俳諧の連歌にすら多分に王朝への傾きを含んでゐるのである。それほど王朝的美の影響と束縛は強大であつたのである。その外にも今日のわれわれとしては俳諧の美、西洋の藝術の美を知つてゐる。その美を美として感ずることも出来る。然しそれらもいづれも教へられた美である。凡俗の人間としてはこの世界から自由に脱却することはなほ困難であり、不可能でさへあるのである。これは凡俗の人間としてはむしろ當然の事であり、その方が穩健な社會人であるかもしれない。その意味ではこれは洋の東西をとはずいづれも同じであらう。何故なら新しい世界をひらくことは、固定化され、したがつて安定化した社會の枠を破ることであるからである。社會の枠を破ることはいつの世でも狂人に類し異端視される。新しい世界はこの狂人に類した天才によつて固定化し安定化した社會の枠の破壊によつて展開される。然しその破壊は單なる破壊ではなくて新しい社會の設定であり普遍性をもつものであり、あるいはもち得るものでなければならぬ。かくてエピゴーネンを作りそれもまた再び固定化され人を束縛するに至る。そしてさらにつきの天才による破壊と新しい秩序の設定とをまつのである。日本の文藝の歴史においてはこの新世界の設定への傾向は常に微弱であつた。その萌芽がそだなかつたり、育つた場合にも逆轉の傾向をはらむことが多かつた。何故かゝる傾向をもつたかは當面の問題ではないが、むしろある意味での古典尊重の力の強大であつたことによるのであらう。しかしそれにしてもなほその間に異質的な新しい世界を展開した場合がないのではない。芭蕉はその一つの場合である。芭蕉はいはゆる俗談平話の中に美を見出すことによつて、いはゞ王朝的枠の外に一步をふみ出し新しい俳諧の世界を設定したのである。王朝的社會においては美とは感ぜられなかつた俗談平話の中に美を見出したのである。貴族化された王朝の枠の外に出で俗談平話の中に美を見出したといふことは足を非貴族的な一般大衆の中に下したといふ事である。一般大衆の中に足を下すことによつて新しい美を見出したといふことは決して偶然の事ではなく考へて見るべき問題なのである。

つぎに觀阿彌、世阿彌によつて大成された能樂においても、滑稽猥雜な一般大衆的な申樂にその出發點を持つてゐる。しかも觀阿彌、世阿彌においてもその能樂は決して今日見る様な固定的なものではなかつた筈であり、もつと柔軟な進展性をもつてゐたものと考へられる。曲舞の要

素をその中に勇敢にとり入れるだけの進展性をもつてゐたのであり、さらに注目すべきことは常に「目利かず」、即ち無智文盲のあるいは批評眼を持たぬ一般大衆にもその能樂の面白からん事を念願してゐたのである。のみならず、それが決して卑俗化して一般大衆に迎合しようとしたのではなく、むしろ逆に卑俗化する事なく然も目利かずにも面白い能樂を最高のものと考へてゐるのである。即ち觀阿彌、特に世阿彌においては、ある意味で一般大衆に足を下した能樂を最高の理想としたといへるのである。常に進展性をもちつゝ新しい世界を展開してきた觀阿彌、世阿彌においてもやはり足を一般大衆の世界に下してゐたのであり、その事に對してはこれを最高の理想とするまでに深い關心を示してゐたのである。勿論觀阿彌や世阿彌と芭蕉においては關心の強さその結果において同一でない點はあるが、さきの芭蕉における俗談平話の中に美を見出す事により新しい世界を展開した事と共に併せ考ふべき事と思はれる。

また西洋においても小説が今日詩を壓倒して文藝の王座に立つに至つた事は一つには小説が中世においては *grand genre* としてみとめられず、全く一般民衆の世界にゆだねられ、そのために却てギリシヤやラテンを規範とする事によるその束縛を受ける事なく自由な發展をとげる事ができた事によるといはれる。ロマンは語源の示す様に古く民衆ラテン語をもつて語られた英雄冒險談のごとき、民衆の興味をそよる事を目的とした物語であつたのである。この様にロマンが *grand genre* として認められず一般大衆にゆだねられてゐたといふ事が今日の新しい小説藝術をきつぎ上げる基をなしてゐたのである。いはば西洋の小説藝術なる新しい世界も一般民衆の中から生れて來たのである。

この様にして新しい藝術が新しい美の世界が展開せられてくる時、觀阿彌や世阿彌においても、芭蕉においても、西洋の小説においても一般民衆の中から生れてきたといふ事、一般民衆の中に足を下す事によつて展開せられてきたといふこと、この事に注意したいと思ふ。

それでは、この様に新しい世界を生み出す基盤となつた一般民衆とは一體如何なる性質のものなのであらうか、何故にかく一般民衆がかく新しきものゝ基盤となり得るのであらうか。天才が新しい世界を生み出す、古い美的範疇の外に出でて新しい美を創り出す、その天才が民衆の中に足を下してゐる、民衆的なものから出發してゐる。とすれば、民衆が無智蒙昧な一般民衆が常に時代を超え、社會を超えた新しい世界を自己の中にひそめてゐるのであらうか。無智蒙昧な批判力をもたぬ一般民衆が、かく社會の枠を破る様な新しい世界をもつてゐるものだと一寸信じられない。一步一步社會に先んじて進展して行くといふ様な進取的な性格をもつてゐるものと考へることができらうか。調査を進められ

ば答はむしろ逆の結果を示してくれる。今日われわれは日本の民俗學の急速な發展のおかげでその確實な資料はすでに豊富にもつてゐる。日本の民俗學が各方面各分野にわたつて示してくれる資料によれば一般民衆といふものはむしろ驚くべき保守性を示してゐるのである。何千年と知れぬ遠い昔の傳統すらまだ今日においても持ちつゞけてゐることも多いのである。勿論民衆の世界も何時知らず時代と共に變轉を重ねてきてはゐる。然しそれとても決して急激な變化はとげてゐないもので徐々に變化をとげてきてゐるのである。急激な社會變革にも民衆はむしろ後れてついて行くのである。知識人の様に逆らふ事も少く、むしろ素直に結局は隨順するものであるとしても決して急激な變革に急激に隨順することはできないのである。表面上形式的に變つた様に見える場合でもその精神構造までが急激には變革はうけ難いもので多分に保守的要素を保存しつゝ徐々に、結局社會と共に動いて行くものである。

勿論一面、その保守的な面について考へて見ると、その表面的形態的に見て何千年の昔から守りつゞけてきたと思はれるものでも、その背後にある心意現象を考へれば、それは決して何千年の昔のまゝではないであらう。形態は遠い昔のまゝでもそれに對する心意現象は遠い昔のまゝではないのがむしろ普通であらう。單なる形態のみを守りつゞける場合が多い。それだけに民衆が保守的傾向が強いといつても、單に表面上に現はれた形態のみをもつてしては考へられないところがある。保守的ではあつても民衆はむしろ素直にいっしらず變轉して行く面があるのである。かく古い形態を保つてゐるとしてもその裏打ちをしてゐた心意現象に變化があるとすれば、具體的には決して昔のまゝとはいへない。形態の如何にかゝはらずそれも一種の變轉と考へられる。かく民衆は保守的傾向は多分に保ちつゞも確かに時代と共に素直に隨順して行くべきものであることは認めねばならない。然しそれとても民衆は決して時代に先んじて、社會の枠を破りそこから逸脱して行くといふ様な變轉はしないものである。この事は今日急激な變轉に際會した日本における一般民衆について考へて見ても確かに考へ得ることであらうと思ふ。上から示された形式的形態的變遷にかゝはらずその統制の及ばぬ面において、また心意現象において如何に多くの舊日本的なものが支配してゐるかを考へてもよくわかる事と思ふ。もし民衆といふものがこの様に進取的な面がなくむしろ保守的な面を常に頑固にもちつゞけ、素直に變轉はするが、時代と共に、あるいは時代に後れてしか變轉しないものとすれば、天才がこゝに足を下し、こゝに基盤を求めることによつて新しい世界を展開してきたといふことは一體何を意味するであらうか。一步先んじて社會の枠を破ることもなく、新しい世界をもつといふこともない民衆が如何にして、天才による新しい世界の展開の基盤たり得るのであらうか。如何にしてかゝる事が可能なのであらうか。

天才を別として一般に身分的にあるいは精神的に貴族化された者その集團においては、新奇な世界は輕蔑し憎惡しこれを拒否するのが常である。自己の安定化した世界の中に安住することを求める。彼等が求める變化はその範圍内においての變化である。そこに纖細、優美、微細な神經は生れてきて、眞なるものへの追求の精神は生れ難い。そこに異質的な新しい世界を生み出す欲求もなく、また新しい世界に對する基盤たりうるものもないわけである。これに對して一般民衆はある意味では貴族よりもさらに保守的であり勿論進取的ではないが、貴族よりもさらに素直に時代と共に變轉して行く。その素直さは教養のなさに基くものである。教養は一面人を社會化し固定化し枠の中にはめこまうとするものである。教養がないといふことはこの固定化された枠が弱い事を意味する。勿論如何に無智蒙昧な一般民衆と雖も人間として社會性を最も根源的な本質とする限り何等かの意味で社會の枠をもたぬといふことはあり得ない。彼等にも常に意外に強い社會の束縛は働きかけてゐる。また無智蒙昧といつても、いはば社會による教育は常に不斷に強力に課せられてゐる。無智蒙昧かもしれないが社會的教育はいつしらす受けてゐる。その限り一般民衆も常に社會の枠の中にとちこめられてゐる。然し知識としての教養をもたぬといふことが貴族とちがつた素直さを生み出す。そこに一種の氣安さがある。それだけ貴族の場合よりも社會の枠は弱い。そこに一般民衆においては保守的であり固陋でさへあるに拘らず、人間そのものがあらあらに露呈されてくる。一般民衆は保守進取を超えて先づ人間である。農業者であらうと商業人であらうと工業人であらうと、職業身分を超えて先づ人間である。さらにまた一般民衆は日本人であると共に日本人を超えた人間である。日本の時所的社會の制約を受けつゝ、なほそれを超えた人間があらゝゝに露呈されるのである。従つて彼等の話す言葉は勿論その時その所の日本語であるがそれと共に、日本語を超えた言語それ自體なのである。日本を超えて人間そのものが露呈されてくる。その話す言葉は日本語であると共に人間の言語それ自體であるといふ性格が強く露呈されてくる。そこに日本語としての性格をもち制約をうけつゝも、一般人間としての共通面が強く出てくるのである。分化した諸言語の底にあつてそれを言語たらしめてゐる人間言語なのである。

天才が基盤とし、そこに足を下すことによつ新しい世界を展開してきた一般民衆はかかる人間としての民衆、職業を超え身分を超え、さらに國境を超えた人間としての民衆である。また言語に即して云へば國語を超え國語を言語たらしめてゐる人間言語としての民衆の言語を基盤として新しい世界を展開してきたのである。芭蕉が新しい世界をくみとつた俗談平話はかゝる言語であつたわけである。かゝる人間は、時所的人間

を、階級的職業的集團的民族的人間を超えてそれを成り立たしめる永遠の人間であり、かゝる言語は時所的言語を、階級的職業的集團的民族的言語を超えてそれを成立たしめる永遠の言語である。

藝術はかゝる永遠にふれる事によつて眞に藝術たり得るのである。天才が一般民衆に足を下しそこに基盤を求めたのはかゝる永遠の人間、永遠の言語にふれるためであつたのであり、かゝる永遠にふれることによつて固定化された社會の枠を破り一步その外に出ることができたのである。然も社會の枠を破りながら新なる社會を設立することができたのはこの永遠の人間、永遠の言語に基盤があつたからなのである。永遠の世界は時所的世界の基盤であり、固定以前の世界であり、それぞれの根柢にあつて流轉してやまない世界である。この流轉して止まない世界こそ眞實の世界であり、常に新なる世界である。この世界に基盤をもつ事によつてこそ常に新なる世界を展開し得る所似である。一般民衆が無智蒙昧であるにかゝらず、否無智蒙昧である故にこそ、階級身分職業時所的制約を超えた一般人間性一般言語性を露呈し、そこに流轉してやまない人間そのもの言語そのものがくみとられるのである。その故にこそ天才を常に新に動かし得たのである。

かつて高木市之助氏が人麿の明るさ、おほどかさ、強さは民謡に基礎をもつところにあるといはれた（文學十八卷二號）事はかゝる意味において卓見であつたと思はれる。然しこれは決して單に人麿に限つた事ではないのである。人麿における民謡との連りは他に比しより直接的であらう。然し他のかゝる民謡との直接的連りをもたぬ作家においても、それがエピソードではなく、次ぎの世に新なる生命を興え常に新たなものを生み出すものであるならば、その作品の生命は根柢にこの永遠なる人間性に、永遠なる言語に結びついてあるところに生れるものである筈である。かくてこそその藝術が普遍性をもち得るのである。時代を超え集團を超え、民族をも國境をも超え得るのである。勿論普遍性もちうるといつても、その普遍性のあり方は一様ではない。ある場合には極く少數の選ばれた人々の共感しか求め得ない場合もあり、あるいはまた、何十年か後の讀者しか持ち得ない場合もある。またある場合には言語といふ強大な障害やなじみの少い風俗習慣のため早急なる共感を求め得ず、その障害突破に多少とも時日を要する場合もある。然しそのいづれの場合においてもそこに藝術的眞が表現されてゐる限り、いかに少數者であるにせよ、いかに時日を要したにせよ普遍性を持ちうるものといつて差支ない筈である。またある場合には觀阿彌世阿彌における様に文字通り萬人の共感を求めそれに成功する場合もある。それがもし通俗化卑俗化による迎合に基くものでないならば、藝位の最高の境地においてこそこれが實現可能だとする彼等の理想が實現されるならば、これもまた眞の意味において普遍性もち得るものといはねばならない。藝術的眞實

はかゝる永遠なる人間永遠なる言語そのものにふれるところに生れる流轉してやまぬものであり、かゝるものこそ普遍性をもち得るものである。一般民衆はかゝる永遠にふれる機縁となるのである。

この永遠なる人間永遠なる言語は時所的に限定された人間、言語を媒介とするものである。特定の人間特定の階級特定の集團民族、その言語を媒介としてのみふれ得るものである。この特定なる時所的に限定された人間、言語を媒介とすることなしにはふれることのできないものである。かくて藝術家は常に時所的に限定されたものであると共に時所的限定を超えるものである。歴史社會的存在であると共に歴史社會を超えて歴史社會を新に創り行くものである。

かく國文學は日本の文藝を研究の對象とするものであり、歴史社會的な日本を對象とするものであると同時に二様の意味において日本を超えた人間、言語の藝術を對象とするものでもなければならぬ。日本の文藝はそれぞれ日本としてのまた作家としての個性的性格をもち、それは日本の歴史的社會的環境の中から生れるものである。その限りにおいて比較の方法によりその個性を個性として把握すると共に、歴史的社會的にその個性的意義が明らかにせられる事が要求せられてくる。然しまた個性的性格をもちつゝ日本を超えて他との共通面をもつてゐるものであり、かゝる共通面は決して日本の歴史的社會的環境のみからしては説明し得るものではない。一般人間として一般言語としての共通の基盤からの説明が要求せられてくる。かく一般人間として一般言語としての共通的地盤を求めることはさらに世界そのものを成立せしめてゐる根源的基盤を求めることとなる。歴史的社會的にその個性的意義をとらへる事は可能であつてもその個性的創造は日本の歴史的社會的基盤からは説明されるものではない。説明根據を歴史的社會的基盤に求めるといふ事はベルグソンのいふ遡及の論理回顧の論理であつて、個性的創造を説明するものではない。個性的創造は世界そのものを成立せしめてゐる根源的基盤としての永遠の人間永遠の言語からのみ説明される。日本人、日本語を超えてその底にあつてそれを成立せしめる根源的基盤からの説明を要求するのである。それは遡及の論理回顧の論理の射程外にある。

本稿は京都女子大學國文學會の講演草稿に加筆したものである。なほ畏友近松良之君との談話に示唆を受けるところがあつた事を記して感謝の意を表する次第である。